

村上市吉浦のウラジロガシ

平 慎三・武田 宏

ウラジロガシは、新潟県に分布する主要な暖地性常緑広葉樹で、村上市粟島が日本海側における分布の北限である。越後や佐渡では海拔約100～300m以下の平野部に接する丘陵や海岸付近等に主に生育する。粟島のウラジロガシは、1990年以降に伐採され絶滅（石沢 2003）しているらしく、県内で生存する最北地は村上市の市街地に近接する城山となっていた（浅見 1980）。

このたび著者の一人の武田宏が2009年7月31日に、その城山から約10km北の村上市上海府海岸にある吉浦に新産地を確認し、その後両著者で常緑植物を遠方からでも識別しやすい落葉期の11月30日に分布状況等を調査したのでその概要を報告する。

吉浦集落の東方の鍋倉山に通ずる歩道に沿って調査をした（図参照）。その結果、集落に近接する車道沿いに1個体（番号1）が見られた他は、172.7mの三角点の西側の尾根に近い斜面に10個体以上が確認された。計測等を行ったのは表の13個体である。

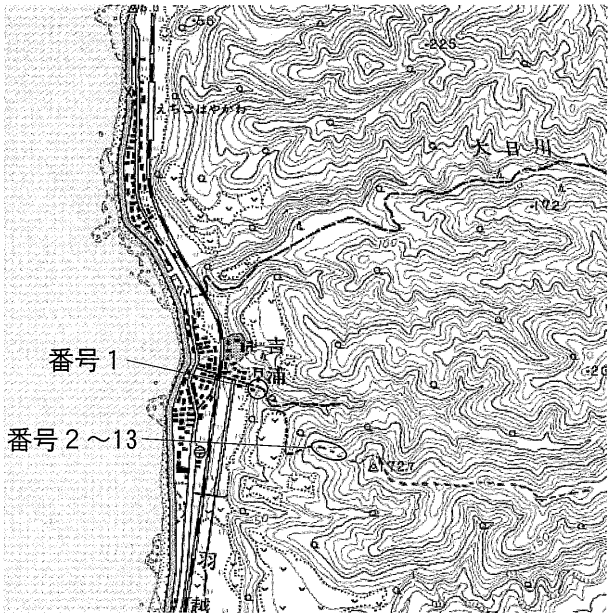


図 ウラジロガシ分布地（縮尺2万5千分の1）

表 ウラジロガシの計測個体

番号	海拔m	樹高m	斜面方位°	傾斜角度°
1	35	7	E	45
2	130	3	S60W	30
3	130	3	S60W	30
4	125	3	S30W	30
5	125	2.7	S50W	25
6	130	1.7	S60W	30
7	135	0.7	N10E	35
8	135	0.5	N10E	35
9	135	1.2	N20E	20
10	135	1.3	N10E	35
11	130	0.3	N35W	30
12	135	1.5	N40W	25
13	140	0.6	S70W	40

番号1は、海岸段丘の畑地に通ずる車道の山側斜面にあり海岸からの距離は約300mである。その樹高は7mで根元で3本に分岐しており、胸高直径はそれぞれ15cm、8cm、7cmであった。すぐ上方は 林内にヤダケの多いタブノキ二次林である。

番号2～13は、尾根筋に近接してあり、一帯は高さ十数mのアカマツ二次林が以前は多いようであり、それらのアカマツは松くい虫被害による枯れ木が多く、現在はアカマツとコナラ、ミズナラ、エゾイタヤ、アオハダ等の交じる森林となっている。そして、高さ2m以下のタブノキが所々に散見された。

番号2～6は、尾根の南西斜面の上部であり、高さが1.7～3mの低木として個体の葉の量も比較的多い。この場所には、他に高さが2～3mのウラジロガシが数個体斜面のより下方に生育が見られる。

一方、番号7～12は、尾根からわずかに北側の斜面にあり、高さは0.5～1.5mで、茎もやや細く、生育はやや劣るようである。

番号13は、最上部にあるウラジロガシの小低木で海岸からの距離や約600mの場所にあり、そこから尾根沿いに内陸方向に500mほど進んだが、他のウラジロガシは確認されなかった。

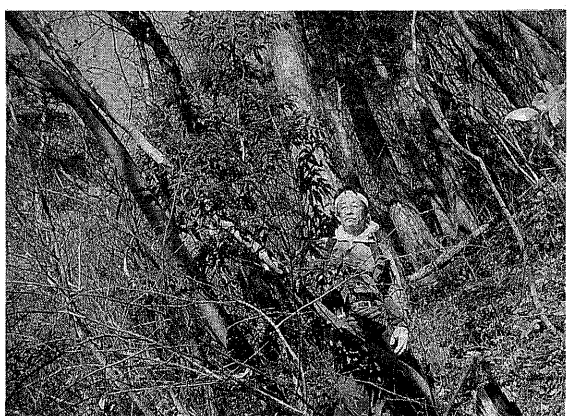
以上のウラジロガシは二次林中に見られるもので、いずれも伐採後に林内に再生して低木等の状態で存続しており、一帯には人為の加わる以前はタブノキと混交する自然林があったとも推察される。現在生存する日本海で最も北のウラジロガシの個体群として、今後の生育状況の推移を見守りながら、保全を続けてゆく必要があると感ずる。



ウラジログシ番号1



番号1上方のタブノキ二次林



ウラジログシ番号3



ウラジログシの葉 (番号6)



ウラジログシ番号12



ウラジログシ番号13

参考文献

- 浅見 賢 1980 新潟県植物分布図集 第1集: 29-31. 植物同好じねんじょ会
- 池上義信 1972 栗島の植物 新潟県文化財調査年報 第11: 139-214 新潟県教育委員会
- 石沢 進 1993 栗島のウラジログシ 続・新潟のすぐれた自然 植物編: 385-386 新潟県
- 石沢 進 2003 北限のウラジログシ: 最後に残った一株も絶滅 新潟県植物保護
第34号: 22 新潟県植物保護協会